

花の万博の理念がもたらした社会的意義と効果 —自然と人間との共生—

鈴木 弘 孝

【要旨】

1990年に大阪の鶴見緑地を会場に開催された国際花と緑の博覧会（花の万博 EXPO'90）が世界に向けて発信した「自然と人間との共生」の理念は、わが国では理念の継承に関わる様々な行事の展開や国の環境政策の進展等の中で、着実に普及が図られている。国際社会においても日本人が二次的自然とのかかわりの中で自然の多様性と生活の持続性を両立させた考え方として高く評価されつつあり、低炭素社会や循環型社会とともに、「持続可能な社会」を具現していく上で、統合的に展開すべき主軸概念を構成している。一方、都市緑化部門においては、市民レベルでの緑化意識の高揚に裏打ちされたガーデニングの広がりやまちづくり等における「公」概念の拡大に顕著にその成果を確認することができた。

キーワード：花の万博 EXPO'90、自然との共生、理念の継承、都市緑化、まちづくり

1. はじめに

国際花と緑の博覧会（花の万博）は、1990年4月1日から9月30日までの183日間にわたり開催された。花の万博は、国際園芸家協会（AIPH）で承認された東洋で初の大国際園芸博覧会（A1クラス）であり、国際博覧会事務局（BIE）の承認を得て開催された特別博覧会であった。花の万博以前にわが国で開催された国際博覧会としては、1970年の日本万博、1981年の沖縄海博、1985年の筑波科学技術博が開催されており、花の万博は、わが国では4番目に開催された国際博である。

博覧会の会場は、大阪市の都市公園である鶴見緑地を中心に周辺部も含めた約140haであり、この博覧会で提唱された基本理念が「自然と人間との共生」である。会場計画では、現況の敷地特性を活かして、会場全体が「山のエリア」、「野のエリア」、「街のエリア」の三つのエリアに区分され、各エリアに則して、それぞれ「山のエリア」には国内外の出展庭園、日本庭園等、「野のエリア」には花の谷、花栈敷、政府出展、大阪市、大阪府出典施設、国際展示水の館等、「街のエリア」には企業パビリオンやアミューズメント施設等が計画的に配置され、パビリオン中心の博覧会会場からパビリオンの屋内外が一体化し、会場全体で基本理



図 1 花の万博 会場全体図（鈴木、1990a）

念が具現化される会場づくりが志向された（鈴木、1990a）。会期中の目標入場者数 2,000 万人に対して、実際の入場者数は 2,300 万人余に達した。

本稿では、花の万博の基本理念である「自然と人間との共生」の概念について触れた後に、この理念がその後のわが国の環境政策や花と緑のまちづくり形成に果たした社会的な意義と効果について、代表的な事例を紹介しながら検討する。

2. 花の万博の基本理念

花の万博の基本理念では、「20 世紀の産業文明の発展は、今あらためて、あの花と緑に象徴された、自然の生命の偉大さを再認識させている。緑こそは、無機物を有機物に変え、生命を育む力である。花はこの優美な表現であり、生命そのものの賛歌である。これを愛し敬うことは、自然と生命を共有する人間の心の本能であり、人間相互の尊重、世界平和への願望の最も素朴な基礎だといえる。（（財）国際花と緑の博覧会協会、1991a）」との基本的認識に立脚し、花の万博を「産業思想の転換を紹介し、産業と生命、文明と自然が対立者ではなく、本来、調和しあう存在であることを確認する場所（（財）国際花と緑の博覧会協会、1991a）」と位置づけている。

この基本理念を包括的にとらえ、博覧会のテーマとして集約した概念が、いわゆる「自然と人間との共生」である。基本理念が定められた後も、博覧会の準備段階では「自然と人間との共存」という語が使用された時期も見られたが、当時の国際花と緑の博覧会協会事務総長の大塩（2000）は、「共存」が「単に相手と一緒に生きる」という概念にとどまるのに対し

て、「共生」は、「人間もまた自然の一部であって、自然のサイクルの中で、共に生き共に滅び行くもの」という考え方を根底に、「我は常に対者（例えば自然）を内包しており、相手との関係において自分も存在する」という考え方を重視し、「自然と人間との共生」という概念に統一させている。このことを、大塩（2000）は、「すぐれて東洋的であり、特に日本人の自然観に深く根付いている」と記している。当時の博覧会協会の印刷物をたどると、昭和 61 年（1986）に発行された開催案内パンフレット（（財）国際花と緑の博覧会協会、1986）では、「自然と共存する産業社会」という言葉が使用されているが、昭和 62 年（1987 年）以降に発行されている印刷物（（財）国際花と緑の博覧会協会、1987）では、花の万博が「自然と人間との共生のあり方」を 21 世紀に向けて探求する場であるという考え方に統一されている。

「共生」は、仏教用語では「ともいき」とも読まれ、「生物も非生物もすべては縁（よ：筆者補足）って存在し、変化する。そのことによってすべての物はつながり、互いに支え合っている」^{（補注 1）}という考え方であり、もともとは、法然上人が師と仰いだ中国・唐時代の善導大師の一文「願共諸衆生往生安樂国」の「願共」の「共」と「往生」の「生」を合わせて「共生（ともいき）」と表現している^{（補注 2）}。異種の生物が行動的・生理的な結びつきをもち、一所に生活している状態を指す生物学の用語である「共生（Symbiosis）」とは同義ではない。

黒川（1987）は、その著「共生の思想」において、善と悪、精神と物質、科学と芸術、機能と形態等、西洋文明の合理主義精神を支えた二項対立による二元論の限界を指摘し、世界や多様な文化がそれぞれの違いを認め、対立を含みながらも、共生していく流動的な多元論の必要性を展開した。この書の中で、「自然と人間の共生」に触れ、黒川は、日本の建築と庭園を西洋と比較しつつ、自然に溶け込み、自然と連続する生活様式として紹介し、これからの都市における共有空間の必要性を指摘した。

すなわち、花の万博が探求した自然との「共生」の理念は、日本人が古来より自然を畏れ敬い、自然の営みに寄り添いながら、日々の営みを持続していく中で体得してきた自然観に根ざしており、自然を人間存在とは二項対立的に捉え、征服すべき対象として認識する西洋的自然観（黒川、1987）とは明らかに対極をなす考え方である。こうして、花の万博のテーマ「自然と人間の共生」は、万博の理念を最も象徴的に表現する考え方として、万博の開催を通じて国内外に広く発信されることとなる。

第 1 回のロンドン万博以降に開催された国際博覧会が、人類がなし遂げた科学技術の粋と産業の発展、文明の成果を高らかに歌い上げた祭典であったのに対して、花の万博は、折からの地球環境問題への関心が国際的に高まりつつある中で、国際園芸博覧会の枠組みを超え、「自然」と「人類」の関係性を問いかけた初めての国際博として、国際博覧会の歴史に一大転機を画したものと言えよう。梅棹（2000）は、「花の万博は、自然を征服し、自然を操作する栽培技術ないしは園芸技術の成果を展示するよりは、多様に展開する自然そのものと人類との調和的共存関係を確認しようとするものであった。一中略—この点に花の万博の文明史的意義があつたといわねばならないであろう。」とその意義を記述している。梅棹は、花の万

博以前に開催された国際博が、専ら科学技術の成果と未来への可能性を展示し、科学技術による人類の進歩を予見させ、謳歌することに主眼が置かれた「科学技術至上主義」であったのに対して、花の万博が科学技術の枠組みにとどまらず、自然と人間の関係性に対する根源的な問いかけをしたことに歴史的意義を見出したのである。花の万博では、花と緑に象徴される地球上の全ての生命と人類とのかかわりについて思いをいたし、「自然と人間との共生」という理念を日本から全世界に向けて発信したのである。花の万博以後に開催された国際博覧会において、「環境」への配慮が当然の開催要件となるとともに、博覧会の枠組みにとどまらず、地球温暖化防止や生物多様性の保全等、国際社会との協調の下で、持続可能な社会（sustainable society）の形成を具現化していく上において、その主軸をなす概念として定着していくこととなる。以下に、内外の環境政策の推移を俯瞰しつつ、このことをたどっていくこととする。

3. 環境政策の進展と基本理念の波及

花の万博が開催された1990年当時は、レスター・R・ブラウン（1989）の「地球白書」が刊行されるなど、人間行動が引き起こした地球環境の異変に対して警鐘が発せられた時期の中にあった。「自然と人間との共生」の理念を掲げた花の万博は、来るべき21世紀が人間中心の科学万能主義から脱却し、かけがえのない自然との調和的共存なくして、宇宙船地球号の安全な航行はありえないことを、従来の国際園芸博覧会の枠組みを超えて、広く国内外に発信した博覧会であった。

花の万博が訴求した「自然と人間との共生」の理念が、1992年にブラジルのリオデジャネイロで開催された「環境と開発に関する国際連合会議（UNCED：United Nations Conference on Environment and Development, いわゆる「地球サミット」）」に先駆けてグローバルに国際社会に提起されたことに、万博理念の先見性と普遍性の観点からも極めて意義深いものを見出すことができる。地球サミットでは、「持続可能な発展（sustainable development）」がキーワードとなり、「環境と開発に関するリオ宣言」、行動計画である「アジェンダ21」等が採択されるとともに、気候変動枠組み条約、生物多様性条約が会議の直前に採択され、サミットの場で署名が開始された。

地球サミットを契機として、1993年にはわが国において環境基本法が制定され、同法に基づいて2000年に策定された第二次の「環境基本計画（閣議決定、2000）」では、環境政策の理念を実現し、持続可能な社会への転換を図っていくための長期的目標の一つに「共生」が掲げられ、社会経済活動を自然環境に調和したものとしながら、「自然と人間との共生を確保」することが盛り込まれている。

一方、生物多様性については、生物多様性条約に基づきわが国では1995年10月に生物多様性の保全と持続可能な利用のための国の方針と施策等を定めた「生物多様性国家戦略」が

策定された。2002年3月に「新生物多様性国家戦略」として見直された後、2007年3月には「第三次生物多様性国家戦略（閣議決定、2007）」が決定されている。第三次の国家戦略では、「自然と共生してきた日本の知恵と伝統」に触れ、豊かな生物多様性を将来にわたって継承し、その恵みを持続的に享受できる社会を「自然共生社会」と位置づけ、今後重点的に取り組むべき施策の方向性として「地域における人と自然の関係を再構築する」ことを基本戦略に位置づけている。

2007年6月に決定された「環境立国戦略（閣議決定、2007）」では、「人類の生存基盤である生態系を守るという観点からは、生物多様性が適切に保たれ、自然の循環に沿う形で農林水産業を含む社会経済活動を自然に調和したものとし、また様々な自然とのふれあいの場や機会を確保することにより、自然の恵みを将来にわたって享受できる「自然共生社会」の構築が必要である。」と記述され、「持続可能社会」を形成していく上で、「低炭素社会」、「循環型社会」とともに総合的に取り組むべき政策課題として位置づけられた。

さらには、2010年10月に愛知県名古屋市で開催された生物多様性条約第10回締約国会議（COP 10）の成果として採択された戦略計画である「愛知目標」のうちの2050年までの長期目標として、「自然と共生する（living in harmony with nature）世界」が位置づけられ、具体的には「2050年までに生物多様性が評価され、保全され、回復され、そして賢明に利用され、それによって生態系サービスが保持され、健全な地球が維持され、全ての人々に不可欠な恩恵が与えられる（環境省編、2011）」世界であるとしている。この会議の際に、わが国から提唱された「里山イニシアチブ」とともに、わが国が古来より、里山等二次的自然との関係の中で、自然の多様性を維持しつつ、持続的な生活を営んできた日本人の考え方や知恵が国際的に高く評価されたことを反映したものと言えよう。

以上述べたように、持続可能な社会を実現していく上で、花の万博が提起した「自然と人間との共生」の理念は、今日ではわが国の主要な国の環境政策を遂行していく上において、その骨格となる重要な概念としての位置を占めていると言えよう。

4. 基本理念の継承と普及事業等の例

表-1は、花の万博の理念継承事業とその時々に関連する内外の環境政策について、推移をまとめたものである。以下に、主な理念継承の事業と理念の継承に果たした役割について概説する。（表1参照）

4. 1 コスモス国際賞

花の万博の基本理念を継承させるための組織として、博覧会終了後に（財）国際花と緑の博覧会記念協会^{（補注3）}が設立され、理念継承の主要事業として、「コスモス国際賞」という授賞事業が開始された。この賞は、「花と緑に象徴される地球上のすべての生命体の相互依存関係

およびこれらの生命体と地球との相互依存、相互作用に関し、地球的視点からその変化と多様性の中にある関係性、総合性の本質を解明しようとする研究活動や業績であって、『自然と人間との共生』という理念の形成発展にとくに寄与すると認められる個人または団体（(財)国際花と緑の博覧会記念協会、2009）」に対して、授与されるものであり、これまで学術研究の面で国際的にも顕著な業績を上げられた著名な研究者や機関が表彰されている。(表2 参照)

4. 2 全国規模の花と緑のイベントの開催

花の万博会場において、博覧会開催中の1990年4月29日には、天皇皇后両陛下のご臨席を賜り、第一回「緑の愛護」のつどいが開催された。翌年1991年より全国の国営公園を会場として、皇太子殿下のご臨席の下で「緑の愛護」のつどいが緑の週間に開催され、2007年からは各都道府県の都市公園を会場として開催されている（国土交通省、2009）。

また、花の万博後に理念を継承・発展させるため花卉業界が主体となって1991年に設立された(財)日本花普及センターでは、1991年より全国的な花卉の普及活動を「花の国づくり運動」として展開するため、各都道府県持ち回り方式で「ジャパンフラワーフェスティバル(JFF)」を開催してきた。JFFは、全国の花卉関係者が花の普及に関する技術やアイデアを競うとともに、花卉生産・利用技術の向上等を図る日本最大級の花の普及イベントとして定着し、花の万博の20周年記念に当たる2010年4月に(財)国際花と緑の博覧会記念協会が主催した「花の万博20周年記念事業」の一環として、「水の館ホール展」において花卉関係団体の参加協力を得て実施し、花の万博後20周年目を節目として、理念継承と花卉園芸分野の普及促進に大きな足跡を残して、事業の終息を見ている。

一方、1995年4月26日から6月4日までの40日間にわたり、岐阜県営可児公園（可児市）を会場として、「花フェスタ'95 ぎふ」が「未来へー花・夢・人」をテーマに開催された。この催しは、花の万博とその理念を継承して、1990年より県内で実施された「花の都ぎふ」運動の5周年を記念して開催され、自然の大切さを認識し「自然と人間との共生」のための知識を得る場とすることを意図して開催されたものである。会場となった県営可児公園には花トピア（岐阜県花き総合指導センター）が設置されており、花の都ぎふ運動の中核拠点と位置付けられていた。岐阜県はバラの苗の生産量日本一を誇っており、イベントの目玉として日本最大級のバラ園が整備された。来場者数は当初50万人を見込んでいたが、予想を遥かに上回る約191万人の来場者が訪れた。（補注4）

2000年3月18日から9月17日までの184日間にかけては、兵庫県淡路島の国営明石海峡公園及びその周辺を会場として、国際園芸・造園博「ジャパンフローラ2000^(補注5)」（通称「淡路花博」）が「人と自然のコミュニケーション」を開催テーマに開催され、会期中690万人余が訪れた。淡路花博では、人と自然のコミュニケーションのあり方を、豊かな自然環境の象徴である花と緑を通じて考え、生きとし生けるものへの「共生」の心を広げていくことを基本理念に掲げており、花の万博の「共生」理念の発展的継承としてとらえることができよう。

表 1 理念継承事業と内外の環境政策の推移

年.月	理念継承事業関連事項	内外の環境政策の動き
1990.4～9	国際花と緑の博覧会開催	気候変動枠組条約採択 生物多様性条約採択 環境と開発に関する国連会議（地球サミット）開催 ・気候変動枠組条約署名開始 ・生物多様性条約署名開始
1991.11	第 1 回緑の愛護のつどい開催 (財)国際花と緑の博覧会記念協会設立 (財)都市緑化技術開発機構設立 (財)日本花普及センター設立	
1991.3	第 1 回全国花のまちづくりコンクール開催	
1992.3	第 1 回ジャパンフラワーフェスティバル開催	
1992.5		
1992.6		
1993.10	第 1 回花の万博記念「コスモス国際賞」	
1993.11		
1994.12		
1995.4～6	花フェスタ'95 ぎふ開催	
1995.10		生物多様国家戦略（閣議決定）
1997.12		気候変動枠組条約第 3 回締約国会議（COP3）開催 ・京都議定書採択
2002.3		新生物多様性国家戦略（閣議決定）
2000.3～9	ジャパンフローラ 2000 開催	第二次環境基本計画（閣議決定） 環境立国戦略 第三次生物多様性国家戦略（閣議決定） 生物多様性基本法制定 生物多様性国家戦略 2010（閣議決定） 第 10 回生物多様性条約締約国会議（COP10）開催 ・里山イニシアチブ 生物多様性国家戦略 2012-2020（閣議決定）
2000.12		
2004.4～10	浜名湖花博開催	
2007.6		
2007.11		
2008.6		
2010.3		
2010.10		
2012.9		

表2 コスモス国際賞受賞者一覧（補注4）

回数	受賞年	受賞者又は受賞団体	職名又は所属（国籍）
第1回	1993	ギリアンツ・プランツ卿	王立キュー植物園長（英国）
第2回	1994	ジャック・フランソワ・バロー博士（物故）	パリ国立自然史博物館教授（フランス）
第3回	1995	吉良龍夫博士	大阪市立大学名誉教授（日本）
第4回	1996	ジョージ・ビールズ・シャラー博士	野生生物保護協会科学部長（米国）
第5回	1997	リチャード・ドーキンス博士	オックスフォード大学教授（英国）
第6回	1998	ジャレド・メイスン・ダイヤモンド博士	カリフォルニア大学ロサンゼルス校教授
第7回	1999	呉 征鑑 博士	中国科学院昆明植物研究所教授・名誉所長（中国）
第8回	2000	デービッド・アッテンボロー卿	映像プロデューサー（英国）
第9回	2001	アン・ウィンストン・スパーン教授	マサチューセッツ工科大学教授（米国）
第10回	2002	チャールズ・ダーウィン研究所	
第11回	2003	ピーター・ハミルトン・レーブン博士	ミズーリ植物園長（米国）
第12回	2004	フーリャ・カラビアス・リジョ教授	メキシコ国立自治大学教授（メキシコ）
第13回	2005	ダニエル・ポーリー博士	ブリティシュ・コロンビア大学水産資源研究所長兼教授
第14回	2006	ラマン・スクマール博士	インド科学研究所生態学センター教授
第15回	2007	ジョージナ・メアリー・メイス博士	ロンドン大学自然環境調査会議個体群生物学研究センター所長兼教授
第16回	2008	ファン・グエン・ホン博士	ハノイ教育大学名誉教授（ベトナム）
第17回	2009	グレッチェン・C・デイリー博士	スタンフォード大学教授（米国）
第18回	2010	エステラ・ベルゲレ・レオポルド博士	ワシントン大学生物学部名誉教授（米国）
第19回	2011	海洋生物センサス科学推進委員会	
第20回	2012	エドワード・オズボーン・ウィルソン博士	ハーバード大学名誉教授（米国）
第21回	2013	ロバート・トリート・ペイン博士	ワシントン大学名誉教授
第22回	2014	フィリップ・デスコラ博士	コレージュ・ド・フランス教授

（注）役職等は受賞時のものである。

さらに、2004年4月8日から10月11日までの187日間、静岡県浜松市の浜名湖ガーデンパークにおいて、「花・緑・水～新たな暮らしの創造～」をテーマに「浜名湖花博^(補注 7)」が開催され、会期中に544万人余の来場者が訪れた。この博覧会は、花の万博(A1)、淡路花博(A2+B1)に次ぐわが国では三番目の国際園芸博(A2+B1)として開催されたもので、第21回の「全国都市緑化しずおかフェア」としての位置づけの下で開催された。(表1 参照)

このように、花の万博以後、国内において万博の理念を継承する大規模な花と緑のイベントの開催を経て、花と緑の最先端の技術と展示に接する機会が継続的に提供され、これらのイベントを契機として展示・園芸技術も飛躍的な発展を遂げた。花の万博を契機として開催されてきたこれらのイベントは、国民生活の身近に花と緑を取り込むライフスタイルの普及、ゆとりと潤いのある国民生活と地域社会の形成に大きく貢献してきたと言える。

4. 3 新たな緑化技術の開発・普及と花卉産業への波及

花の万博の会場内では、花と緑の技術について新たな実験が多数試みられた。会場内のゲート周辺や主要な通り沿いには、大型のコンテナに樹木を植栽した「コンテナ緑化」の技法が初めて用いられた。コンテナ内の樹木を季節の変化に応じて、入れ替えた他、会場内の催事の状況に応じて、移動させることが可能である。この手法は、2005年に開催された愛知万博の会場にも適用されている。また、花壇の造成では、ユニット化したプランターを連続して大花壇を造成する「パレット花壇」(写真1参照)、花を立体的に演出する「立体花壇」等の技術(写真2参照)が駆使された。((社)日本造園コンサルタンツ協会、1991) コンテナ緑化や立体緑化の技法は、その後都市の顔となる公開空地等の広場や主要な街路等の緑化手法として広く普及するとともに、ハンギング・バスケット等の立体緑化の手法は、今日では一般市民の個人庭園レベルへも広く浸透しつつある。

全国の都道府県等が出展した「スポット・ガーデン」は、都市内にある小広場等の公共スペースの緑化の新たな手法として提案され、万博後の街



写真1 大花壇



写真2 フラワータワー

角の修景等に生かされるとともに、万博後に開催された「全国都市緑化フェア（国土交通省、2014）」の都道府県出展花壇として恒常化していった。

一方、花の万博を契機に、万博の理念を継承し、新たな緑化技術の開発・普及を行うために 1991 年に設立された(財)都市緑化技術開発機構^(補注 8)では、人工地盤や屋上、壁面等の緑化が困難な空間での立体緑化技術を開発するため、民間企業等により共同研究会を組織し、軽量土壌や灌水、植物選定等について、技術マニュアルを策定する等、ビルの屋上等の特殊空間緑化の普及に官・民共同連携による取り組みを進めてきた。同機構は、国に代わる公的サービス機関として、立体緑化に関する技術の集積と普及の推進役となり、公園・緑化技術五箇年計画策定作業、民間主体の特殊緑化研究会の組織化、屋上緑化や壁面緑化に関する技術マニュアルの策定、屋上緑化コンクールの開催等を通じて、今日の屋上や壁面等の建物緑化技術の普及と発展に中核的な役割を果たしてきたと言えよう。

4. 4 ガーデニングの普及

花の万博では、従来のパビリオン中心の会場計画から、会場全体でテーマを具現することを指向し、会場構成として、「まち」・「野」・「山」の三つのゾーンに区分され、それぞれのゾーンに適した花壇や緑化の技術、国際庭園やコンテスト花壇等の出展が一体となって、特色ある花壇や庭園が彩る快適な博覧会会場を現出した。(図 1 参照)

「山のエリア」では、海外から出展された国際庭園の沿道沿いに幅 2m の「沿道花壇」が配された。(写真 3 参照) また、「野」のエ



写真 3 沿道花壇



写真 4 花の谷



写真 5 ワイヤーバスケット

リアでは、会場中心にある「大池」周辺に、野趣に富んだ「花壇」や「大花壇」・「花の谷」が配された。(写真 1、写真 4 参照) さらに、「まちのエリア」には、主動線である「祭りの大通り」沿いに祝祭を演出するバナーや木と竹で構成されたファニーチャーとともに、「ワイヤーバスケット」や「立体花壇」が多彩に配された。(写真 2、写真 5 参照)

花の万博後に起こったバブル経済の崩壊により、わが国ではその後の社会経済環境が大きく変貌を遂げ、「物の豊かさ」から「心の豊かさ」へと国民の意識も変化していく中で、花の万博で提案された花と緑の新しい展示手法は、都市公園や街路空間等の公共スペースを始め、個人の住宅の庭やベランダにコンテナ花壇やハンギング・バスケット等様々なタイプの花壇で立体的に演出する手法を普及させる等、都市生活者の身近な空間に花と緑を取り込むガーデニングの普及に先導的な役割を果たしたと言えよう。

ガーデニングの普及等により身近な自然とのふれあいを求めるニーズが高まりを見せる中で、住民や企業と行政との協働によるまちづくりの動きが顕在化していくこととなる。住民レベルでは、単に自分たちの庭という限られた私的空間を花と緑で美化するというにとどまらず、NPO や愛護会（地域のボランティア団体）等の組織化により、行政との役割分担の下、道路沿いや駅前広場、公園等の公共空間における花壇づくり等を通じて、花と緑豊かなまちづくりと良好な都市環境の創出に市民が主体的な役割を果たすようになる。

(写真 6 参照)

花の万博後の 1991 年度より、万博の基本理念を継承発展させる事業として、日本花の会



写真 6 道路沿いの空地进行緑化した例
(大阪府富田林市)



写真 7 オープンガーデンの例 1
(兵庫県三田市内)



写真 8 オープンガーデンの例 2
(兵庫県三田市内)

が行ってきた「全国花のまちづくりコンクール（日本花の会、1991）」等の顕彰事業は、市民レベルでの花と緑のまちづくり、コミュニティの再生に寄与するとともに、国民の花に親しむまちづくりの普及啓発に大きく貢献してきたと言える。

近年では、ガーデニングの普及により、国民の園芸への取り組みが広がりを見せる中、市民の園芸技術と演出方法の質的向上は顕著となり、近年では、一般市民が個人庭園を広く公開し、庭園間を周遊する「オープン・ガーデン（平田、2010）」への取り組みも各地で見られるようになっている。（写真 7、写真 8 参照）

4. 5 ボランティアによる緑化活動の先駆け

花の万博では、会期中の花の管理や車イスの貸し出し等を行うボランティアの組織的導入が図られた。会場内での花柄摘み等の維持管理を日常的に行う「花と緑のボランティア」活動は、会期中に花を生き生きとした状態で維持管理していく上で、重要な役割を担った。花の万博で試行されたボランティアによる管理活動は、その後、市民と行政が協働で行う公園づくり等、公共空間の緑化活動における「ボランティア」の役割を広く周知する機会となり、公共空間における市民参加システムを普及していく上でその先鞭となるものであった。花の万博会場となった鶴見緑地では「花と緑のボランティア」のメンバーが中心となり、万博後には「花博フワークラブ」が組織され、万博での知識と経験を活かして、花博記念公園として再整備された鶴見緑地公園内の花の管理等に携わるボランティア活動を現在も継続している。

また、万博が開催された地元大阪の緑化活動を通じた花と緑あふれるまちづくりを推進する上で、「グリーンコーディネーター」が専門的な知識や技術を習得し、都市緑化のボランティア活動に中心的な役割を果たしている。

5. おわりに

国際社会において、地球温暖化、オゾン層の破壊、砂漠化と酸性雨等の問題が顕在化し、地球環境への警鐘が鳴らされ始めた 1990 年に、花の万博が世界に向けて発信した「自然と人間との共生」の理念という万博でまかれた種は、その後わが国では理念の継承に関わる様々な行事の展開や国の環境政策の進展等の中でしっかりと根づき、今日では低炭素社会や循環型社会とともに、「持続可能な社会」を具現していく上において、総合的に展開すべき主軸概念として定着しつつある。また、都市の緑化部門においては、市民レベルでの緑化意識の高揚に裏打ちされたガーデニングの広がりや質的水準の高度化に加えて、市民との協働によるまちづくりの広がり等「私」なるものから「公」なるものへの意識の変化と活動領域の拡大を確認することができた。

地球温暖化防止や生物多様性の保全、有限な資源の循環の必要性など、「サステナビリティ（sustainability）」を維持し、生態系サービスを確かな見通しのもとで後世代に継承し

ていくことは、私たち現在（いま）を生きる世代の責務でもある。そのためには、国際間のグローバルな連携と協調の下で、先進国と発展途上国との環境問題をめぐる基本的な認識のギャップを、より高い視点に立って超克していくことが極めて重要であると考え。一方、国内にあっては、国と地方、官と民の適切な役割分担の下で、行政と市民、企業、NPO 等の様々な主体が、衡平な立場で協働で取り組むべき政策課題として環境問題をとらえておく必要がある。

筆者は、花の万博の開催時に、博覧会を主催する(財)国際花と緑の博覧会協会に建設省(当時：現国土交通省)から出向し、政府出展の計画・建設、運営、並びに会場全体の計画調整、建設と管理等の業務に協会職員として関わった。その後、国営公園の大規模プロジェクトや国の地方ブロック機関の「さいたま新都心」への集団移転計画、都市の緑地政策等に国の行政の立場で長年にわたって関与することとなったが、筆者にとっても、博覧会後に携わった行政の現場において、花の万博の理念を如何に具現化していくかは、様々な国の事業に携わる中での重要な課題となった。

国土交通省退官後の 2008 年には、縁あって花の万博終了後の 1991 年に設立された(財)国際花と緑の博覧会記念協会^(補注 1)に奉職することとなり、上述した「花の万博コスモス国際賞」の授賞事業等花の万博の理念継承事業に 2 年ほど関わらせていただいた。同協会の事務室は、花の万博が開催された鶴見緑地(現在の花博記念公園鶴見緑地)内で、万博当時は中央ゲート近くで松下館(ビッグバード)として使用されていた建物が、現在もほぼ当時のままの形で存置されており、その建物内の一角にある。花の万博会場跡地は、現在は大阪市が管理する「花博記念公園鶴見緑地」として再整備されている。山のエリアにあった外国庭園は、時間の経過は否めないが、現在も存置されており、当時の面影を今に残している。この他にも、大阪市の出展施設「咲くやこの花館」の大温室や国際展示水の館等の施設が現在もほぼそのままの形で維持されている。約 20 年ぶりに花の万博の跡地に身を置いての理念継承の仕事は、万博経験者としても大変感慨深いものを禁じ得なかった。

筆者は、現在、城西国際大学において「環境の学び」として環境政策や緑地計画、都市の緑化等について、学生たちに講義を受け持っている。この中で、環境への負荷の少ない持続可能な社会を形成していく上で、「自然と人間との共生」の場として都市空間を位置づけ、如何にして資源循環や生物多様性とも調和が図られた良好な環境を創造していくことが可能かを学生たちに問うている。

花の万博の提唱した「自然と人間との共生」の理念は、地球温暖化や生物多様性、化石資源の枯渇等環境問題のグローバル化が進展する中で、その課題克服に向けて人類としての英知が問われている今日、より普遍性をもったグローバルな『キーワード』としての位置を占めていることを、本稿では環境政策の具体的な事例を基に整理した。また、理念継承のための国や都道府県、関係団体の緑化行事の開催等を通じて、「自然と人間との共生」の理念の普及を市民レベルでの緑化活動の広がりの中に見出すことができた。

22 世紀の地球が、「緑の地球 (Green Earth)」として太陽系惑星の中で燦然とその美しさと輝きを保っていることを願い、今後も花の万博に関わった者の一人として、立場は変われども、その理念の継承に微力を尽くしていきたいと思う。

【補注】

- 1) 若原道昭, 龍谷大学の概要, 学長挨拶,
<http://www.ryukoku.ac.jp/university> (2007.9.1)
- 2) 浄土宗について、「共生」と「ともいき」
<http://jodo.or.jp/honentomoiki/kyoseitomoiki.html> (2014.12.1)
- 3) 2013 年 4 月に公益財団法人に移行し、現在は公益財団法人国際花と緑の博覧会記念協会となっている。
<http://www.expo-cosmos.or.jp/about/index.html>
- 4) 公益財団法人国際花と緑の博覧会記念協会ホームページを基に筆者が作成した。
<http://www.expo-cosmos.or.jp/main/cosmos/jyusyou/index.html> (2010. 10.1)
- 5) 可児市総務部企画調査課 (1996) 「花フェスタ'95 ぎふ 参加記録」
- 6) 博覧会 collection 「国際園芸・造園博 ジャパンフローラ 2000 (淡路花博)」, 乃村工藝社
<http://www.nomurakougei.co.jp/expo/exposition/detail> (2014.10.24)
- 7) 静岡国際園芸博覧会協会編集 (2005) 浜名湖花博公式記録「世界の花が咲きました」, 静岡国際園芸博覧会協会, 280pp.
- 8) 2013 年 4 月に公益財団法人に移行し、現在は公益財団法人都市緑化機構となっている。
<http://urbangreen.or.jp/ug/about/>

【引用文献】

- 1) 安部浩, 日本人が使う「共生」の意味,
http://www.mizu.gr.jp/people/ppl_18b.html
- 2) 梅棹忠夫 (2000) 「文明史から見た 1990 年花の万博の意義」『花の万博 10 周年記念誌「生命の祭典」』, (財) 国際花と緑の博覧会記念協会, 2-9
- 3) 大塩洋一郎 (2000) 「花の万博随想」『花の万博 10 周年記念誌「生命の祭典」』, (財) 国際花と緑の博覧会記念協会, 106-111
- 4) 閣議決定 (2000) 「第二次環境基本計画」
http://www.env.go.jp/policy/kihon_keikaku/plan/kakugi121222.html
- 5) 閣議決定 (2007) 「第三次生物多様性国家戦略」
<http://www.env.go.jp/press>
- 6) 閣議決定 (2007) 「環境立国戦略」

http://www.env.go.jp/guide/info/21c_ens/21c_strategy_070601.pdf

- 7) 環境省編 (2011)「環境白書」日経印刷株式会社, 545pp.
- 8) 黒川紀章 (1987)「共生の思想」徳間書店, 334pp.
- 9) 広辞苑, 岩波書店
- 10) 国土交通省都市地域整備局公園緑地・景観課 (2009)「平成 21 年度版公園緑地マニュアル」, (社)日本公園緑地協会, 694pp.
- 11) 国土交通省 (2014)「全国都市緑化フェア」について
<http://www.mlit.go.jp/crd/park/shisaku/fukyu/toshiryokka/>
- 12) (財)コスモス国際賞 (2009)「コスモス国際賞」, 21pp.
- 13) (財)国際花と緑の博覧会協会 (1986)「花の万博 EXPO'90」
- 14) (財)国際花と緑の博覧会協会 (1987)「EXPO'90 国際花と緑の博覧会」
- 15) (財)国際花と緑の博覧会協会 (1991a)「EXPO'90 国際花と緑の博覧会公式記録」, 571pp.
- 16) (社)日本造園コンサルタント協会 (1991), 花博の会場計画とデザイン, 173pp.
- 17) 鈴木弘孝 (1990a)「花の万博会場計画」『空気調和・衛生工学』64 (10), 3-8
- 18) 日本花の会 (1991)「全国花のまちづくりコンクール」
- 19) 平田富士夫 (2010) 多様化したオープンガーデンの活動内容・課題とその背景との関係性、環境情報科学論文集 24、37-42
- 20) レスター・R. ブラウン (著), 松下和夫 (監訳) (1989)「地球白書 '89 - '90 環境と調和する経済社会の構図」, ダイヤモンド社, 368pp.

【参考文献】

- 建設省・農林水産省 (1991a) 国際花と緑の博覧会政府公式記録, 436pp.
- 建設省・農林水産省 (1991b) 国際花と緑の博覧会政府出展報告, 444pp.
- (財)国際花と緑の博覧会協会 (1990) EXPO'90 国際花と緑の博覧会公式ガイドブック, 312pp.
- (財)国際花と緑の博覧会協会 (1991b) EXPO'90 国際花と緑の博覧会公式記録写真集, 351pp.
- (財)国際花と緑の博覧会協会 (1991c) EXPO'90 国際花と緑の博覧会公式記録花と緑, 631pp.
- (財)国際花と緑の博覧会協会 (1991d) 花の万博 業務記録 No.28「会場建設」, 715pp.
- 鈴木弘孝 (1989) 政府出展の概要, 積算資料 臨時増刊, (財)経済調査会, 前文 25-32
- 鈴木弘孝 (1990b) 国際花と緑の博覧会の概要, 建築士 39 (451), 日本建築士会連合会, 14-18
- 鈴木弘孝 (1990c) 国際花と緑の博覧会の会場計画, 建築設備士 1990 (7), (社)建築設備技術者協会, 26-29
- 鈴木弘孝 (1990d) 会場計画について, 月刊グリーンビジネス No.339, システム開発研究会, 4-8
- 鈴木弘孝 (1990e) 国際花と緑の博覧会におけるみち・ひろばの構成について, 道路建設 No.506, (社)道路建設業協会, 70-71
- 鈴木弘孝 (1990f) 主催者から見た花の万博, 緑の読本 26 (16), 公害対策技術同友会, 14-17

The Social Significance and Effects Brought By The Basic Principle of EXPO'90

Hiroataka Suzuki

Abstract

The International Garden and Greenery Exposition (EXPO'90) was held in 1990 at Tsurumi-ryokuchi in Osaka, Japan. The theme of the EXPO'90, "The Harmonious Coexistence between Nature and Mankind", has steadily spread through various events and advances of national environmental policies in order to succeed the theme in Japan.

In the international society, the thought has been highly evaluated that Japanese people, concerning in the second growth nature, has been combined diversity of nature and sustainable life, and the theme has been consisted of the key concept of realizing "the sustainable society", with the low carbon society and the society with an environmentally sound Material Cycle. On the other hand, the results in the city greening section could be confirmed conspicuously by expanding of the "Public" concept in the spread of gardening, city planning and so on, which has been based on increasing greening conscious among the citizens.

Keywords : EXPO'90, succeeding the theme, harmonious coexistence with nature, urban greening, city planning